



北前船などは風待ちを余儀なくされるため、現在の長距離トラックのような2点間の運輸だけではなく、風待ちの間も商売を行う移動商社的な海運業でしたから、立ち寄ることの多い港には各地の物産がもたらされました。

現在の交通事情ではなぜ<sup>へんび</sup>辺鄙な稲取に「つるし飾り」のような雅な風習が残っていたのか理解できない人も多いのですが、酒田の「傘福」も稲取の「つるし飾り」も江戸時代の海運(稲取の場合、風待ち船)がもたらせた遺産ということでは、同じルーツをもっていると言えるでしょう。

明治維新によって船番所が廃止されると、東京に出入りする船は下田港に寄る必要がなくなりました。

また、明治35年の日露戦争で、ロシア海軍は日本経済を混乱させるため、北海道海域で北前船の掃討作戦を行いました。

200年の繁栄を誇った北前船も、風頼みの航法では蒸気機関を備えた軍艦には敵うわけもなく、<sup>かな</sup>壊滅的な打撃を受けて消滅してしまっただけです。

この後の海運は航行自由な機械船に変わり、各地の風待ち港も急速に繁栄を失ったのです。

伊豆稲取も伊豆急行が開通するまでは本当に寂れた小さな漁港町になってしまったのです。

明治以降の雛飾りの流行期には、経済力の大きい都市部では豪華な内裏飾りが競われ、素朴な飾りは失われましたが、寂れたからこそ新しい波に流されないで古いものが残ります。

稲取のつるし飾りが『どんと焼き』で燃やされてしまうということも、「なくなるから作る」という技法の伝承に役だったようです。

酒田の「傘福」はその名の通り、傘の周りに飾ります。初期のものは戦<sup>いくさ</sup>に使う軍配(ぐんばい)なども下げてあり、祭りの鉾やお寺などへの奉納物で、必ずしも桃の節句の飾り物ではなかったようです。

このことは数多い酒田旧家の雛飾りの中で「傘福」があるのは僅か一軒だけということから推測できますが、華やかなことから近年は雛飾りに取り入れられるのが一般化しています。

神社やお寺などに奉納する「<sup>かさぼこ</sup>傘鉾」は現在でも北前船文化の残る各地にあり、酒田のように雛飾りに発展させようとする地域も広がっています。

柳川の「さげもん」は手まりを連ねて下げます。当初はいろいろな飾り方であったようですが、後年の複製の際、伝統の柳川手鞠づくりの方に指導を仰いだことから手鞠を連ねたものを「さげもん」の基本形としています。

稲取では観光地でもあることから、<sup>すた</sup>廃れかけていた雛のつるし飾りを地元の女性たちが復活展示したところ、大変好評を博しました。

それ以後、地元旅館組合の女将さんをはじめとした女性たちの渾身の努力で常設展示場を作り制作指導をするなど、つるし飾りの普及に努めた結果、同時期の河津桜と相まって、伊豆観光のメイン行事に発展したほか、各地につるし飾りブームを起し、ひな段につるし飾りを添えることが全国に定着しつつあります。

本来のつるし飾りは手作りの贈り物でしたから、価格を考慮したものではありませんが、購入するとなるとかなり高価なものです。個数×時間を考えると当然のことですが「それなら手作りで、、、」と、手芸店や文化サークルなどでも盛んに製作していますが、製作レベルの低いものもかなり見受けられます。

これは歴史や意味合いを理解しないまま安易な解釈や、本を頼りに製作することが多いからに見受けられます。本によっては、写真は稲取のものを使って型紙は編集部で作成というものもあって、解説通りに作っても写真とは似て非なるものも多いようです。

つるし飾りが一般化するにつれて、粗悪な輸入物や伝統を継承しない手芸店などの飾り物が増え、これと区別するために稲取では、地元商工会主催の「桃の会」と、当初から制作に関わった「絹の会」の作品を「稲取のつるし飾り」として推奨しています。

私見ですが、稲取においてもかなりレベルの差が見受けられますので、一般においてはさらに丁寧な作り方を心がけたいものです。

稲取のつるし飾りは一般的に、下げ輪の中心に1本、周囲に4本の計5本の下げひもに、5、7、9、11、13の飾りを付けます。

女性のしあわせを願う雛飾りでは、「割れる、別れる」として偶数を嫌うとされていますが、本来は陰<sup>おんみょう</sup>陽思想の陽数(奇数)信仰から来ているものと思われます。

輪の上部に飾られるのは八幡神社の御神使の鳩で、中央に飾られる三番叟は、その八幡神社への奉納芸能です。赤い魚は稲取漁港特産の金目鯛。

這い子や三角(香袋、薬袋)なども子供のしあわせを願うもので「可愛いから」「きれいだから」だけでなく、下げ飾りにも一つ一つの意味がありますので、別途、モチーフごとの説明をアップしていきますのでご覧ください。

